

宮城・多賀城跡

- 1 所在地 宮城県多賀城市市川・浮島
- 2 調査期間 一九八〇年（昭55）四月～六月
- 3 発掘機関 宮城県多賀城跡調査研究所
- 4 調査担当者 佐藤則之ほか
- 5 遺跡の種類 国府跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

多賀城跡は古代陸奥国府跡で、奈良時代には鎮守府も併置されていた遺跡である。遺跡は仙台平野の東北端に位置し、海拔二〇m～五〇m程の小丘陵上に立地しており、一部は海拔四m程の沖積地にも及んでいる。周囲には方約九〇〇mの範囲に築地が巡らされており、そのほぼ中央に政庁がある。

第三八次調査は政庁の東を刻む谷の出口にあたる作貫地区南端の沖積地を対象として実施した。調査の結果、現在の地表下約三・五mで、区画施設の基礎地業とみられる遺構を検出した。

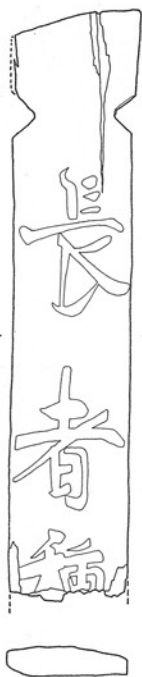
この遺構は杭材を敷き並べた東西に延びるいかだ地業と、その南側でこれと並行して延びる打ち込みの丸太列とからなる。

いかだ地業は、まずスクモ層上に杭材を東西に三列並べ、その上

にこれと直交させて同様の杭材を密に並べ、その中央部に面取りした材木を据えて盛土したものである。盛土には二期あり、第一次盛土が崩壊して周囲に黒褐色粘土層が堆積した後、第二次盛土がなされている。



多賀城跡 木簡出土地点図



これらのいかだ地業と打ち込みの丸太列はこの地域一帯がスクモ層が形成されるような軟弱地盤の低湿地であったため、区画施設構築に際して行なった基礎地業であろうと考えられる。

木簡は第一次盛土と第二次盛土に挟まれる自然堆積の黒褐色粘土層中より出土した。この層からは他に一端の左右に切り込みのある木簡様木札四点、曲物などの木製品、土師器、須恵器、瓦などが出土している。なお、この層は一〇世紀前半頃に降下したと思われる灰白色火山灰に覆われていること、層中にロクロ土師器杯が含まれていることなどから、ほぼ九世紀代に堆積したものと思われる。

8 木簡の积文・内容

〔ノ〕長者〔種カ〕
□×

(96) × 39 × 9
680

柱目板を素材としたもので、頭部は斜めに削られており、上端から約三・五cm下の左右に切り込みがある。横断面形は中央部がやや厚い凸レンズ状で、上端の一部と下端は欠損している。表面は風化が著しい。墨痕はほとんど残っておらず、文字部分のみがわずかに浮出ている。文字は大きめの楷書で、切り込みの下から書き始め、文字の間隔はそれぞれ異なる。

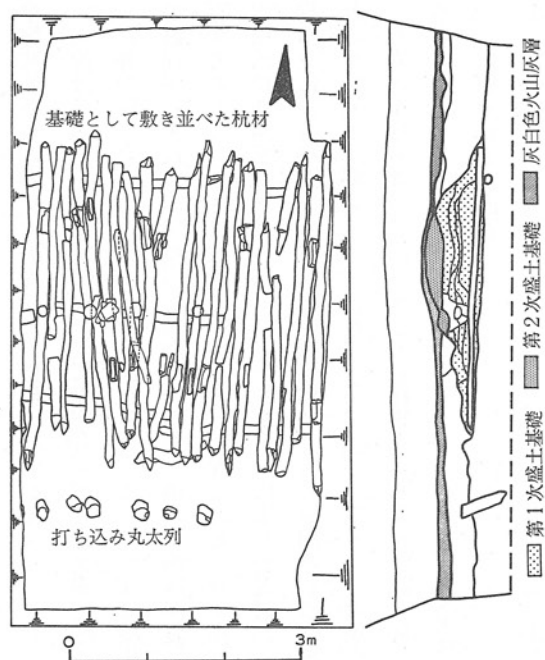
9 関係文献

宮城県多賀城
跡調査研究所

『宮城県多賀城跡調査研究所年報一九八一』

一九八二年

(佐藤則之)



多賀城跡第38次発掘調査区遺構図